

水島 メモリーズ

水島こども食堂ミソラ♪編



関係性を紡ぎだし、新しい「価値」をつくる



2019年12月ごろの水島子ども食堂ミソラ♪の様子。
今、この男の子はおしゃべりもできるようになっています。(井上正貴さん提供)

子ども食堂という名前は聞いたことがあっても、具体的に何をしているところか知っていない人は多くないかもしれません。子ども食堂は、地域住民や自治体が無料または低料金で子どもたちに食事を提供する場だと言われます。いろいろな形態がありますが、必ずしも子どもだけのための食堂ではなく、大人が来てかまいません。子どもが一人でも安心してこられることがポイントです。

子ども食堂は、2012年に東京から始まって全国に波及し、今では全国で6000か所

関係性をつくりだす子ども食堂

の子ども食堂が運営されているそうです(認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ「2021年全国箇所数調査及び第1回全国子ども食堂実態調査」)。水島子ども食堂ミソラ♪もその一つです。

水島子ども食堂ミソラ♪の運営を担っているのが井上正貴さんです。井上さんが以前、困窮家庭の中学生の学習支援をしていたことが、子ども食堂にかかわるきっかけとなりました。井上さんは「学習支援で必要なのは『関係性をつくる』こと。関係性がない中で学習を押しつけ

目次

関係性をつくりだす子ども食堂	p3
受け継がれる支援の輪	p6
身の回りから社会を変える	p10
地域カフェとみずしま財団について	p14

地元農家さんからの野菜の寄付(井上正貴さん提供)





地域カフェでお話しする井上正貴さん（撮影：山口百香）

られてしまうと、学校で学習が困難になってしまう状況と同じになってしまうじゃないですか」と語ります。子ども食堂には、ただお腹を満たすだけでなく、一緒にご飯を食べるといいうことを通して関係性を紡ぎだすという役割があります。

「困窮家庭の子どもたちは、学校や地域で孤立している、お手本になる大人がいない、家庭で安らぐことができない、学習の機会が得られていない、生活習慣が身につかない、発達障がいがあったり精神的に不安定だったりする。だったら、それとは真逆の関係性をつくってあげばいいと考えたんです。たと

えば、孤立しない学校や地域をつくる、お手本となる大人がいる、安らげる家庭をつくる、学習の機会を得られている、生活習慣が身につく、発達障がいや精神的な不安定さに配慮された社会をつくる、ということですね」。改善策は人間同士の関係性をつなぐことにあると、井上さんは考えています。

水島こども食堂ミソラの活動は、2017年1月に準備会を設立したことではじまりました。2017年の8月にプレオープンし、9月から定期的に活動を開始しました。

当時は水島商店街の中で毎月第3土曜日の昼に活動をして

いました。2020年2月までで30回以上開催され、のべ1500人ほどが参加する活動に育っていききました。

ところが、2020年2月に新型コロナウイルスが蔓延したことで、義務教育機関の休校要請が出て、子ども食堂に集まるのが難しくなりました。それだけでなく、休校要請によって子どもが自宅待機となったため、シングル家庭では子どもの面倒を見るために仕事に行けなくなり、金銭的にも窮状に陥って餓死者が出るのではないかと危惧されました。そこで、みんなで集まるのではなく食べ物を取りにきてもらうフードシェア

会を開いたり、さらにフードシェアカーで各所に食べ物を届けてまわったりして、200世帯に食料の配布を行いました。みずしま財団もフードシェアの会場を提供し、井上さんの活動に協力したことがあります。

そしてついに、コロナ禍の中だからこそ少人数でも集まれる場所をつくろうと、一軒家を借りてみんなのお家「ハルハウス」を開設します。月に1度、50人が集まるのではなく、毎日5〜10人でも集まればいいという方向転換です。そのために常設の居場所の設立が必要になったのです。こうして従来のフードシェア会だけでなく、支援者の

交流やミーティング、シングル家庭を招いての食事会など、少人数の集まりをハルハウスで開催できるようになりました。

ハルハウスは、社会福祉の母と呼ばれるジェーン・アダムズの活動拠点だった施設の名前でもあります。井上さんは、ハルハウスを「家であり船」と考えていたことから、シンボルマークを船としましたが、実は家主が船乗りで、彼がこの家を船と見立てていたことをのちに知ります。重なる偶然に驚きを隠せなかったそうです。

受け継がれる支援の輪

井上さんは水島について「僕にとつての水島の空は南にコンビナートがあつて、真っ赤に染まっている。なんで夜なのに空が赤いのだろうと恐怖を感じていた」といいます。一方で、「子どものころ、地域の中に温かい人間関係があつたことも記憶していて、それを今につないでいく活動として、子ども食堂を運営している」とも話します。

井上さんの両親は、地域医療の場で「温かい人間関係」を紡いでいく仕事をしていました。母親は水島協同病院の看護師。父親の弘章さんは岡山大学卒業

後、ぜん息児の健康回復のための施設「あおぞら学園」の指導員として働いてもらえないかとスカウトを受け、水島協同病院で働くことになりました。両親は職場で出会いました。

あおぞら学園は、病院の近くで、ぜん息児が集団生活する施設です。医師、看護師、保育士等も含めた集団でぜん息児や家族の援助を行います。1978年に開設され、1989年に閉鎖されるまでのべ50人の患者を受け入れていました。水島協同病院は、ぜん息患者の治療や支援、公害をなくす



あおぞら学園でのマット運動。
1979年ごろ（倉敷市公害患者と家族の会資料/みずしま財団蔵）



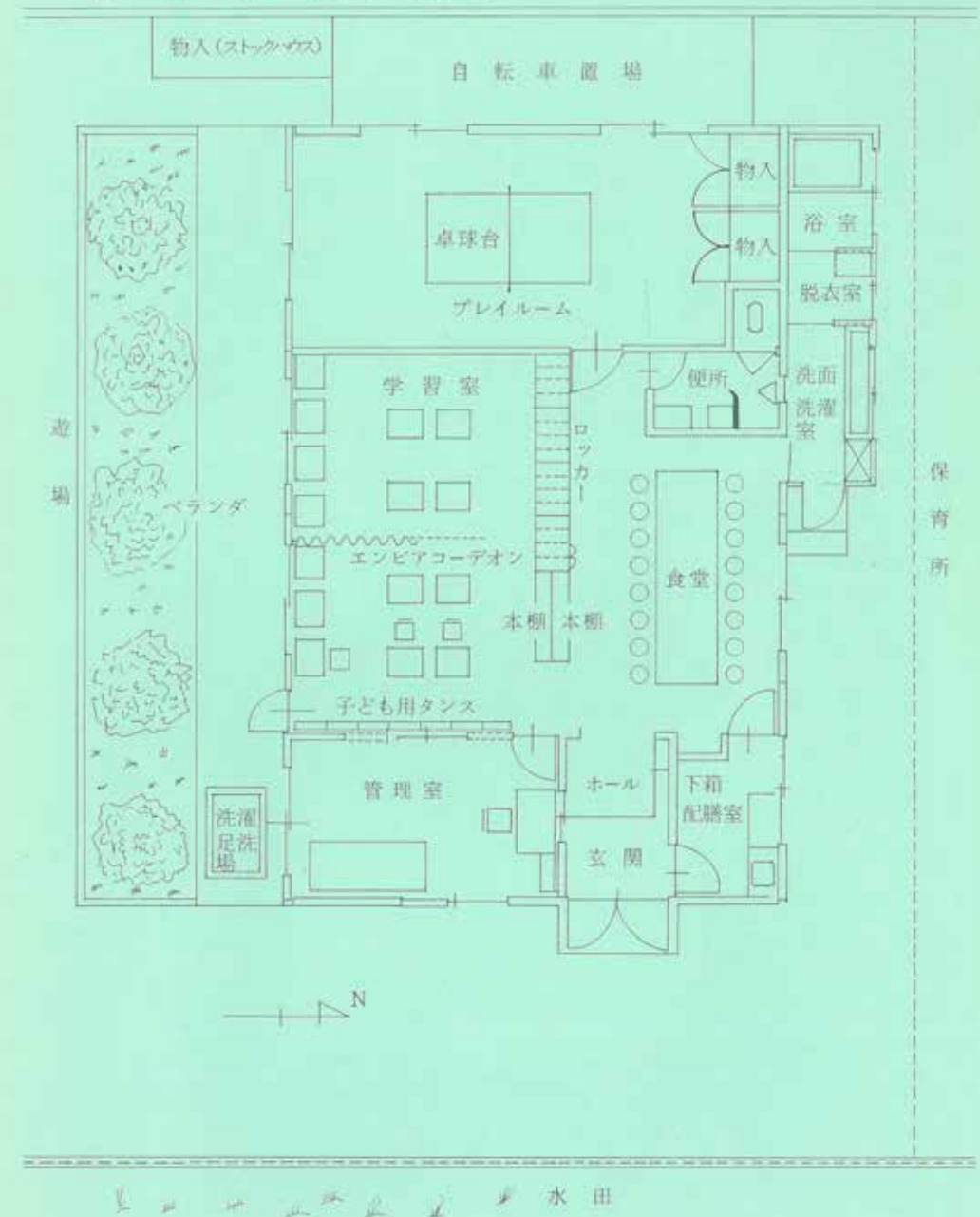
井上弘章さんがあおぞら学園で乾布摩擦を指導しているところ。
1979年ごろ（倉敷市公害患者と家族の会資料/みずしま財団蔵）

活動などに熱心に取り組んでおり、あおぞら学園をつくつたのもそうした病院の理念に基づくものでした。

あおぞら学園では、ぜん息を悪化させない生活習慣を身につけるため、子どもたちは親元を離れて、治療を受けながら集団生活を行いました。弘章さんも、ぜん息で苦しむ子どもたちを支援し、生活を立て直す手伝いをしていたのです。子ども食堂の活動と共通点が多そうです。

公害によるぜん息は、空気がきれいにならなければ改善しません。病気で息苦しく、運動や勉強が続けられなくなり、ますます健康状態が悪化してしま

青空学園（平面図）



あおぞら学園の平面図

出典：水島協同病院「あおぞら学園のあゆみ—難治性小児喘息患者特別入院施設療養6年間のまとめ」1985年（みずしま財団蔵）

ます。そしてなにより、病気に立ち向かう気力がなくなってしまう。苦しい中でも運動をして体力を養い、発作時の対応や病気との付き合い方を体得してほしい、そして遅れがちな勉強に取り組み、達成感を知って前向きに生きてほしいという願いから、あおぞら学園が設立されました。

弘章さんは、病気で運動をすることが難しい子どもたちを励まし、乾布摩擦や水泳、マット運動を指導しています。あおぞら学園で暮らした子どもたちは「クラスで一番マット運動が上手」とほめられるほどになったといっています。

記録によれば、あおぞら学園ですごした子どもたちは、入園前と比べて、入園中に発作の改善をみたものが約9割にのぼり、さらにその8割以上で、卒園後も発作の改善が継続したとされています（水島協同病院「あおぞら学園のあゆみ—難治性小児喘息患者特別入院施設療養6年間のまとめ」1985年、5頁）。

治療だけでなく、生活を丸ごと改善していくという取り組みは、公害地域で苦しむ子どもたちの成長を手助けしました。

なぜ、水島こども食堂ミソラ♪の活動に井上さんが一生懸命になるのか。「その源泉は父が

あおぞら学園で活動していたことにもあるのかもしれない」と井上さんは言いました。



学習室での様子。

1979年ごろ（倉敷市公害患者と家族の会資料 / みずしま財団蔵）

身の回りから社会を変える

水島は倉敷市の中心市街地と比べると家賃なども安く、困難な状況にある家庭が多いことを肌感覚で感じていると井上さんは言います。『あの地域には行かないほうがいい』と言われたこともありましたが、でも、水島に誇りを見出したら、なんともないです。ここだからこそできることがあるだろうって思います」。

水島は新しい街で、いろいろな地域から人が集まってきています。だからこその人なつっこさがあり、困っている人たち

が助けあってきたのです。そういう地域の経験を、井上さんは前向きにとらえるようになりました。子ども食堂もそうした人間関係の中で育まれています。

「苦労はするけれど、楽しさは倍増!! 仲間が増えるんです」と井上さんは笑います。ハルハウスの支援の特徴は、さまざまな世帯や世代による交流を重視し、疑似家族のようになつなかりをつくることにあるとあります。

いっしょに活動する人たち

も楽しそうです。小田昌加よしかさんは地域で玩具店を営んでいました。水島の発展とともに利益を伸ばしていましたが、それに陰りがみえたところで店を閉じました。現在は整体師として仕事をしながら、地域の児童委員や、子ども食堂の運営に携わっています。「最初は参加者でしたけれど、現在は支援者側に移行してきました。支援者になるには資格や能力は必要なく、とりあえず参加することが大切。家族の中でも、わかりあえないこ



高校生主体の子ども食堂。メニューの決定や調理など高校生が企画します。(井上正貴さん提供)



通称“米ボラ”。ご寄付いただいたお米をシェア会に向けて小分けにするボランティアさんたち。
(井上正貴さん提供)



子守りを愉しむ会の面々。血縁を越えた地縁の豊かさを。左:小田さん(井上正貴さん提供)

ん回っていくはずですよ。
水島は、戦後日本で高度経済成長の一翼を担った街です。ハルハウスはその水島で、経済成長とは違う新しい「価値」をつくりだそうとしています。人間同士がつながることによって、みんなが幸せになれる場所。そこから社会を変えていこうとする始まりの場所。ぜひ一度のぞいてみませんか。ハルハウスは「みんなのお家」なのですから。

しえんしゃ食堂ヨゾラ☆ 地域の支援者間の連携と交流を促します。(撮影：林美帆)



とがあります。自由に話しあう中で、解放される感覚があります。子ども食堂で活動すると、ありのままの自分でいいと思えるし、自己肯定感が高まって楽しい。その楽しさを感じてほしい」と語ります。
小田さんは自分の価値観の変化についても教えてくれました。「玩具店をしていたときは商売に成功することに達成感はありませんでしたが、いつなにか起きるかわからず、将来に不安も抱えていました。商売をやめて、子ども食堂にかかわるようになってから、おカネもうけとは違う人間の幸せ、新しい価値観に気がついたんです。そのことでだいぶ

気も楽になりました」。
井上さんも言います。「今の世の中には、競争に勝っておカネをもうける人間になるのがいいことだ、という価値観が蔓延しています。しかし、それによって格差が広がり、困窮する家庭も生まれているのに、手を差し伸べる人がいない。むしろ、人間同士がつながって、お互いに持っているものを与えあう社会の方が幸せになれるはずですよ。水島でそのような場所をつくりだしていきたい。このハルハウスがその実践の場所になればと願っています。世界を変える方法はわからないけれど、変えようとしてはじめれば歯車がどんどん



あおぞら学園があったころの県道水島港線水島小学校バス停付近。
左が南瑞穂町、右が北春日町。南から北をのぞむ。(1986年11月18日)
安藤弘志氏撮影 (倉敷市歴史資料整備室蔵)

地域カフェについて

岡山県倉敷市の中にある水島地域は、日本有数の鉄鋼・石油のコンビナートを有している地域ですが、江戸時代の新田干拓によって作られた農村でもあり、瀬戸内海の豊かな海に養われた漁場を有していることから漁業の文化もある、日本近代の色んな歴史が詰まった魅力的な場所です。そんな水島地域の新しい魅力を探し出すのが「みずしま地域カフェ」です。「水島メモリーズ」はみずしま地域カフェで集めた情報をもとに構成しています。

水島地域の「ワクワク」をお伝えできればと考えています。

みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。

住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています。

DATA

みんなのお家「ハルハウス」

〒712-8024 岡山県倉敷市水島北春日町 5-17



- 表紙写真 : みんなのお家「ハルハウス」外観 (撮影: 山口百香)
裏表紙写真 : みんなのお家「ハルハウス」室内の様子 (撮影: 山口百香)
文 : 林美帆 (みずしま財団)、除本理史 (大阪公立大学)
協力者 : 井上正貴 (水島こども食堂ミソラ♪)、襦屋祐司 (元・水島協同病院)、山本幸子 (みずしま財団)、福田憲一 (みずしま財団)
デザイン : 山口百香 (Myu dear,)
発行日 : 2022年7月
発行 : 公益財団法人水島地域環境再生財団
〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町 13-23 TEL086-440-0121

地球環境基金の助成を受けて製作しました



みずしま財団
Web サイト



水島
メモリーズ